

# 中世における洞済交渉の一側面

原田弘道

## 一

初期日本曹洞宗は総持寺の系統によつて、一大飛躍の礎が築かれたが、特にこの派は、初期において、無門慧開（一一八五—一二六〇）の法を受け、紀州由良興国寺で特異な禪風を挙揚した心地覚心（一二〇七—二九八）の臨済宗法燈派との交渉は密接なものがある。

元来、永平下と法燈派の関係は、覚心が深草時代の道元禪師（一二〇〇—一二五三）に参じたことに始まるが、瑩山禪師（一二六八—一三三五）が覚心に参じて以来、にわかに両派の関係は深くなつてゐる。覚心下の恭翁運良（一二六七—一三四一）、<sup>3</sup>孤峯覺明（一二八七—一三六一）が瑩山禪師の提撕を受ければ、<sup>4</sup>瑩山下の明峯素哲（一二七七—一三五〇）、<sup>5</sup>峨山韶碩（一二七五—一三六五）<sup>6</sup>が恭翁の門をたたき、孤峯下の抜隊得勝（一三二七—一三八七）は峨山の会下に一度までも参じてゐる。<sup>7</sup>また孤峯は後醍醐天皇の帰依をうけるや、それを機縁として

太祖門派を朝廷に近づけることに努力し、<sup>8</sup>正平八年（一三五三）、後村上天皇より瑩山禪師への謚号、仏慈禪師下賜を実現しているのである。

この両派の交渉を歴史的に裏づけるものとしては多くの資料が存するが、思想交流を知るうえで一つの視点を与えるものに、中世の冊子本で、古来、偽書と言われながら、道元禪師の名が冠せられている『永平開山道元和尚仮名法語』がある。

この流布本の万治二年（一六五九）刊以前のものでは、文安三年（一四四六）筆写の『永平道元和尚見性論』（目録では『仮名見性集』）、室町期の写本『仮名見性抄』、亨錄三年（一五三〇）の『仮名見性抄』（奥題『自見集』）、中世末から近世初頭の『前越州永平開山仮名見性抄』、明暦三年（一六五七）刊『永平開山道元和尚仮名法語』の六種がある。その他二、三があげられているが、最古の写本『永平道元和尚見性論』は由良興国寺の法燈国師心地覚心の系統と見られる宝山なる

人の手になるもので、流布本に比べて三分の一の分量で、流布本その他後世のものは、文章が増加し、その内容は祖師の語、機縁をあげて分りやすくしてあり、また過去七仏等伝統性が強調されており、また減っているものとしては、教学的内容の個所が削除されて、具体的なものが増えている点が指摘されている。そして作者に関しては、覚心の法嗣で、瑩山禪師にも参禅し、後、大乗寺三世となつた恭翁運良が一應考えられる。即ち彼の撰述には『正法眼藏語』『禪戒正伝血脉相承説』『見性抄』その他語録があり、特に同名の『見性抄』があつて、これがそうではないかと考えられているのである。そして六地藏寺所蔵『無名冊子』中に存する『道元和尚見性論』は同寺三代惠範上人がおそらく高野山から蒐集したもので、こういつた点からも作者は恭翁とされるのであるが、私も同感である。

そこで面山瑞方（一六八三一一七六九）も『訂補建撕記図会』に

印版ノ永平開山仮名法語ト題スル、一冊ノ初ノ十八条ノ中ノ、第十六条一条ノミ、祖師ノ語ニテ、別處ニモ出タリ、余ハミナ祖語ニアラズ、他師ノ作ニ祖語ヲ加ヘシナルベシ。<sup>(1)</sup>

と言う如く、道元禪師の偽書という事になるが、誰が何時、何の目的でという事が問題となるが、資料が乏しく不明な点が多いので、以下の論述は推論に過ぎないが、問題提起の意

味合いも込めて、曹洞宗と法燈派との密接な交渉のもと融合的学風のもとにおけるこの『永平開山道元和尚仮名法語』の持つ意味を考えてみたいと思う。

この『仮名法語』の公刊は明暦三年（一六五七）であるが、現在容易に見られる万治二年版は、十八条より成る『永平開山道元和尚仮名法語』に加え、『洞谷開山法語』『洞谷二代明峯和尚法語』『洞谷僧生和尚法語』『峩山和尚法語』『峩山和尚法語』の五条、計二十三余を編入したもので、これを見ると、この『仮名法語』の後世における役割が伺える。駒沢大学所蔵本は十五条であるが、万治本が最古の宝山筆写になる『永平道元和尚見性論』より三倍にも増えているのは、これらが当時重用され、広く行われていたことを意味するのではないか、そしてそれは中世において『正法眼藏』が行われていなかつたことを逆に裏づけるものではあるまいか。こういふ諸点を考慮しながら考察を進めて行きたいのである。

(1) 「師三十六歳、依<sub>ニ</sub>城南深草極楽寺道元和尚、伝<sub>ニ</sub>授菩薩戒血脉、道元入宋之時、天童山如淨和尚相伝之血脉也、元乃永平開山仏法上人矣」「円明国師行実年譜」「続群書類從」第九輯上、三五〇頁。

(2) 「法燈坐<sub>ニ</sub>南紀之興國、師往造、一見大賞<sub>ニ</sub>識之<sub>ニ</sub>留過<sub>レ</sub>冬」「日本洞上聯灯錄」卷二、『曹洞宗全書』史伝上二四四頁。瑩山禪師諸伝は覚心との関係を伝えるものはない。

(3) 「曾賀州大乘欠<sup>ニ</sup>主席。瑩山和尚命<sup>レ</sup>良住持。」『本朝高僧伝』卷二十六。『大日本佛教全書』一〇一、三六六頁。「加州大乘欠<sup>レ</sup>主、瑩山和尚招<sup>レ</sup>師住持」『延宝伝燈錄』十五、『大日本佛教全書』一〇八、一一二頁。

(4) 「還參能州洞谷瑩山瑾和尚、欲探洞上宗風、師亦誓云、不了畢大事、再不出此山矣。」聖珍「孤峯和尚行実」『続群書類從』第九輯下五六九頁。

(5) 「賀州大乘寺沙門素哲伝」『本朝高僧伝』卷三十。『大日本佛教全書』一〇一、四二〇頁。

(6) 「能州總持寺沙門紹碩伝」『本朝高僧伝』卷三十一、『大日本佛教全書』一〇一、四二三頁。

(7) 「元享四年、山謂曰。吾已老年。子當<sup>ニ代</sup>吾行<sup>ヤ</sup>化。師不<sup>得</sup>已。莅<sup>ニ</sup>總持席。会未<sup>ニ</sup>幾何。諸法玄學川奔海會。塙山拔隊、

黒川月菴等。皆腰包札謁。得<sup>レ</sup>人之盛。無<sup>ニ</sup>踰<sup>レ</sup>師者。」「總持寺峩山碩禪師伝」(『日城洞上諸祖伝』卷之上、『曹洞宗全書』史伝上、四五頁)

(8) 今枝愛真博士『中世禪宗史の研究』

(9) 椎名宏雄氏「『永平開山道元和尚仮名法語』について」資料、昭和五十年十一月十八日、第二回宗学大会発表による。

(10) 「訂補建撕記図会」『曹洞宗全書』史伝下、一五八頁

後は永平寺に秘蔵されていて、時の住持が年一回、虫乾しの時のみ拝覧を許される状態にあった。従つて、『正法眼藏』は参学や在家化導の指導書としての意義は全く失われていった。康応元年(一三八四)頃、永平寺九世(八世)宋吾は、これを慨いて、六十巻本を謄写して副本を備え、拝覧謄写を許したのである。これは義雲が『品目頌』を書いた嘉歎四年(一三二九)から六十一年目に当り、太容梵清の八十四巻書写になるのは、更に約二十年後で、<sup>(2)</sup>これもあまり公開された形跡はない。この間に五山制度が成立している。<sup>(3)</sup>

六十巻本の編集を遡る問題として回録据拾説、官本説、意図的編集説という説があるが私は義雲による意図的編集と見るのである。従来この編集意図について後世に大きな影響を与えた見解に『正法眼藏現成公案聞解』の官本説がある。万仞も「葛藤」卷補闕に洞雲寺本を官本と認めながら、京師の官家より請われたものとして同様な見解を示している。

洞雲寺の本は六十巻にて官本と名けたり、相伝ふ、古代京師の官家より正法眼藏を請せらるるとき、公辺他宗に忌憚る文句ある巻を義雲和尚抜去て六十巻のみ献上せりといへり。<sup>(4)</sup>

かかる見解が生れてきたのは、私は、『正法眼藏』には直接関係ないが、拔隊得勝の言葉にあるのではないかと思う。即ち、『和泥合水集』上巻に、

『正法眼藏』は永平義雲(一一五三—一二三三)が六十巻を編纂して、参学の指南書として活用していたのであるが、以<sup>(1)</sup>

や、その由来をたづねるにたゞこれ日本の弘安年中に蒙古がよせきたる時、祈禱のためにとて、官家よりの所望によりて、始めていだしたことなり（傍点筆者）

とあって、弘安四年（一二八一）の第二次元寇の際に、「官家よりの所望」によつて行われたという、この文章が面山和尚の『洞上僧堂清規考訂別録』卷第一、「日分課誦考訂」に引用されている。繁を顧みず、掲げれば、

支那ノ諸清規ニハ、聖節ノ看經、マタ檀家ヨリ請ズル吉凶ノ斎ニヨリテノ看經、或ハ夏中ノ楞嚴会、仏祖忌ノ儀ノミ見ヘテ、毎日ノ課誦ノコト見ヘズ、因テ考フルニ四件アリ、塩山ノ和混合水ニ云ク、禪家ニ三時ノツトメシタルコトハ、イヅレノ禪錄ニカノセタルヤ、ソノ由來ヲタヅヌルニ、タダコレ日本ノ弘安年中ニ蒙古ガヨセタル時、祈禱ノタメニトテ、官家ヨリノ所望ニヨリテ、ハジメテシイダシタルコトナリ、ツラツラ思フニ、此ノツトメハ祈禱ニハアラズ、タダ仏法王法ノスタイルベキ因縁ナリ（傍点筆者）<sup>⑦</sup>

孤峯覺明の『上開山和尚書』や拔隊得勝の『仮名法語』『塩山和混合水集』にも見当らない。しかし大應派下の月菴宗光の『月菴仮名法語』と『普勸坐禪儀』との間には親和性がみられるが、『正法眼藏』との関係は少い。しかし同一の文章が一ヶ所ある。「出家功德」卷に

とある。面山もしくは『聞解』の編者斧去鈍、大容栄泉、あるいは万仞和尚はこれをヒントに六十巻本の官本説という編集意図を思いついたのではないかと思うのである。

そこで、南北朝、室町時代において、『正法眼藏』が表面から姿を消した理由に、積極的理由と消極的理由の両面を考えておきたい。

『正法眼藏隨聞記』と『普勸坐禪儀』は行われていた。例

えば月菴宗光（一三一六—一三八九）の『仮名法語』には『普勸坐禪儀』の文句を受けた個所が存在する。<sup>⑧</sup>また峨山下の太源派においても同様であるが、洞済交渉がはつきりしていて、語録や法文が残っている覺心の『由良開山法燈國師法語』『法燈國師坐禪儀』には『正法眼藏』や道元禪師の言葉を受けた個所はない。古写本には存在しないが、万治版『永平開山道元和尚仮名法語』には『隨聞記』の引用はあるが『眼藏』の引用はない。即ち万治本の第十六条「示<sup>ニ</sup>出家人一事」の一文と長円寺本『隨聞記』二ノ十三の一文は酷似している。流布本『隨聞記』にも見られるものである。そして又長円寺本と流布本とは文章に移動が見られ、内容も非常に異同がある。これらは『隨聞記』が古くから実際に世に広く行われていた事を示すものと思われる。

『塩山和混合水集』にも見当らない。しかし大應派下の月菴宗光の『月菴仮名法語』と『普勸坐禪儀』との間には親和性がみられるが、『正法眼藏』との関係は少い。しかし同一の文章が一ヶ所ある。「出家功德」卷に

すでにうけがたき人身をうけたるのみにあらず、あひがたき仏法にあひたてまつれり。いそき諸縁を抛捨し、すみやかに出家学道すべし。<sup>⑨</sup>

と『月菴仮名法語』「示<sup>ニ</sup>了仁居士」の

たまたまうけがたき人身をうけ、あひがたき仏法にあふて道心をおこさず、仏法をさとらずんば、一度人身をうしなひてながく泥梨にしづみはてんことを<sup>(10)</sup>は極めて類似している。

曹洞宗内には『正法眼藏』を受けたものは、瑩山禪師の『瑩山和尚清規』に「洗面」「洗净」を受けている。

十二時中行履、如弁道法、赴粥飯法、洗面法、洗净法、并寮中清規、參大己事師法等、悉細也、悉可暗之<sup>(11)</sup>

また衛藤即応博士は『正法眼藏序説』で、

法語と弁道話との直接の関係はいずれにあるかと云えば、弁道話の十九問答の終りの方で、この坐禪は在俗の人もつとむべきや、

との間に答える中に、「ちかごろ大宋に馮相公といふありき、祖道に長ぜりし太官なり、のちに詩をつくりて、みづからをいふにいはく」として一偈を挙げてあるが、太祖の法語では、長老とい

かに前述の如く、一部の人達によって参究されていたのである。そして五位に基いた祈禱禪、更に、伝授・密參・三物伝授相承・兼稟の傾向のもとに洞済融合的、密教的学風が主流を占めてきた所に、この『仮名見性抄』の持つ一つの意義が認められるのである。しかし『正法眼藏』が参究されることが少なかつたとしても曹洞宗側の禪者において、恭翁運良の『見性抄』に「永平開山」の名が冠せられたとは考えられないでのある。例えば成立年月順に編輯された八十九巻本の『正法眼藏』が大乘寺に伝えられていたし、<sup>(16)</sup>永平寺、大乘寺、永光寺においても、わずかながらも『眼藏』参究が行われて

祇陀大智（一二九〇—一三六六）に『正法眼藏』を受けたと思われる文章が指摘されている。<sup>(13)</sup>

ところが南北朝以後は『正法眼藏』に代って、五位が宗旨

参究の主役になり、洞済融和的学風が益々顕著になつてき

た。その消極的理由は、『正法眼藏』が、当時の五山十刹諸山という宗教制度のもとでは、臨済宗批判がそのまま「政治批判の書」という意味を持つようになる事である。そこに義雲の六十巻編集の意図が伺える。その積極的理由は、五位が動乱の時代における時代精神に適応性を持つていたからと考

える。とにかく『正法眼藏』は表面から姿を消した。これら

の問題の詳細は拙稿「中世曹洞禪の一考察」に述べた。<sup>(14)</sup>

このように中世においては『正法眼藏』が姿を消し、わざ

かに前述の如く、一部の人達によって参究されていたのであ

る。そして五位に基いた祈禱禪、更に、伝授・密參・三物伝

授相承・兼稟の傾向のもとに洞済融合的、密教的学風が主流

を占めてきた所に、この『仮名見性抄』の持つ一つの意義が

認められるのである。しかし『正法眼藏』が参究されること

が少なかつたとしても曹洞宗側の禪者において、恭翁運良の

『見性抄』に「永平開山」の名が冠せられたとは考えられな

いのである。例えは成立年月順に編輯された八十九巻本の

『正法眼藏』が大乘寺に伝えられていたし、<sup>(16)</sup>永平寺、大乘寺、

永光寺においても、わずかながらも『眼藏』参究が行われて

る。『洞谷記』『伝光録』に、その他、明峯素哲、峨山紹碩、

いた形跡が存する面からも考えられるのである。

(1) 六十巻本『正法眼藏』の各巻の大要を頌をもつて示した

『品目頌』の基本姿勢は、「序」に、「正法眼藏。密伝密付。古之与今。嫡伝嫡祖。永平元祖入宋。穿鑿五葉根蒂。帰朝能為三天之蔭涼。志慾婆心。以和字柔漢語。奇妙善巧。令人不累文言。如石含玉。似地擎山。聊綴卑語。述其大旨耳。後昆此八字不打開。妙心源未通徹。一大藏教。少林妙訣。夢也未見在矣。嘉曆四年中夏曾孫義雲和南拝書。」(「義雲和尚語錄卷之下」『曹洞宗全書』語錄一、三五頁)とあって、卑語を綴つて大旨を述べ、「後昆此八字不打開。妙心源未通徹」として、参考の貴重な指南書たる事を示している。

(2) 「丹波州一森村玉雲寺開山太容梵清和尚、応永二十六年巳亥、加州仏陀寺に住するの時自ら書写する所の八十四巻の真本、今現に同州苑部徳雲寺に秘在す。中古以来、篤信の師僧相競いてこの八十四巻を拝瞻す」(「彫刻永平正法眼藏凡例」岩波文庫本『正法眼藏』上、三五頁)。

(3) 『早霜集』秀峰説。『智覺普明國師語錄』陞座、足利義詮小祥忌陞座法語、『無象和尚行状記』等参照。

(4) 「惠辨和尚之篇集が七十五巻、其後三代論あり、寂円和尚

之後任、義雲和尚時代大に宗風を震い中興す。此時天子より勅旨にて永平の正法眼藏を上れとある時、雲和尚六十巻を選て上る、是を曰官本、余は他宗を排し、帝王のこと抒を誇りたることもあり、世界へ憚る故に不呈上也、余り二十八巻は名秘密正法眼藏て不出外」「正法眼藏現成公案聞解」『正法眼藏註解全書』一、一八六頁。

(5) 『正法眼藏諫蠹錄』卷下。

(6) 拔隊得勝「和泥合水集」『禪門法語集』上巻、一二一頁。

(7) 面山瑞方「洞上僧堂清規校訂別録」卷第二『曹洞宗全書』清規、二三五一三六頁。

(8) 『月菴仮名法語』「示宗三禪閣」に「大道方所なし、目前を離れず。心法形なし、物に即して即ち是なり。一念不生れば、脱体顯露す。疑心纔かに起れば、是非紛然たり。是非紛然たれば、六道現前す。疑心休歇すれば、生死永く離る。……」とあるが、『普勸坐禪儀』の「道本円通」「大都當處ヲ離レズ」「違順纔カニ起レバ、紛然トシテ心ヲ失ス」等を受けたものであろう。

(9) 「出家功德」『正法眼藏』岩波本下巻、一六四頁。

(10) 「示宗清禪閣」『月菴仮名法語』一五右。

(11) 「瑩山和尚清規」『常濟大師全集』

(12) 衛藤即応博士「正法眼藏序説」

(13) 東隆真氏「瑩山禪師と『正法眼藏』」昭和五〇年十一月十八日宗学大会発表資料による。

(14) 『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三十三号、一一七頁一五〇頁参照。

(15) 「彼壳臨済曹洞宗者、妄称的的相承、拠丈室房長老、接学者、令看古則、一則了一則、如疊捨子、景徐周麟『翰林胡蘆集』九夢記参照。」

(16) 永久岳水博士『正法眼藏の異本と伝播史の研究』四七一四八頁。

駒大所蔵『仮名見性抄』の内容の項目は、「向上」「向下」、「得法」「無相」「無念」「教内」「教外」の十五条で、流布本には「示出家人」「僧俗因果」「示一無位人」の三条が加えられ十八条となっている。<sup>3)</sup>面山瑞方が指摘する「示出家人事」の「朝ニ道ヲ聞テタニ死ストモ可ナリ。学道ノ人、尤モ此心アルベキ也」の一文は、流布本のみにあるものである。

長円寺本『正法眼藏隨聞記』三ノ十三の「朝ニ道ヲ聞カバタニ死ストモ可ナリ。今ノ学道ノ人、コノ心有ルベキナリ」以下の一節、及び『正法眼藏仏向上事』巻の盤山宝積禪師の「向上一路千聖不<sub>レ</sub>伝」<sup>3)</sup>の言葉と「向上」の「然れば向上の一路千聖も不<sub>レ</sub>伝と見へたり」とが共通している以外は全く関係ない。のみならず、項目を見ただけでも既に道元禪師の説示でないことは言うまでもないであろう。更に曹洞禪者によるよりも、臨濟禪者によると考えられるという事は、前述の諸点の他に、次にこの『見性抄』に引用されている禪者の語を検討する事によつても明らかとなる。

「理致」「機関」「向上」の項目は『大應仮名法語』にも見られるものであるが、『仮名見性抄』十五条の本文に引用されている禪者について見ると、臨濟、徳山（二回）、円悟（二

であることと同じ傾向にあるのである。

このように『仮名見性抄』は全く臨済宗の「法語」と云えるが、著者恭翁の属する法燈派は、『本朝高僧伝』二十五に大凡国師之伝不嗣十世。今掃土而尽。悲夫。<sup>(5)</sup>

とあるのを見ると、大体十五世紀末葉から十六世紀初頭にかけてまで存続し、それ以後断絶してしまったと考えられる。

これは曹洞宗の永平下十世から十一世の時代で、曹洞宗は全国の有力寺院も三百から五百寺になろうとしていた。ようやくその存在も五山派からも注目され、<sup>(6)</sup> 江湖会の盛儀も取り上げられる様になつたが、なお五山派に較べれば、曹洞宗が如何に微々たる存在であったかは、『陰涼軒日録』延徳元年（一四八九）十二月条に

越前国善應寺諸山事、自<sub>二</sub>彼門中<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>建署<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>白<sub>二</sub>鹿苑<sub>一</sub>条々又、  
賜<sub>ニ</sub>行於愚、彼兩通渡<sub>二</sub>与堀河殿<sub>一</sub>云、曹洞宗出世之在無之、以<sub>レ</sub>  
放望<sub>レ</sub>之也。以<sub>ニ</sub>御氣嫌<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>御伺<sub>ニ</sub>云<sup>(7)</sup>

と辞を低くして、諸山に列せんことを請うている点からも伺える。このように宗団としても、実践行の面からも、独自の自治的な宗団として、苦難の道を歩んでいたのであつたが、こういった時代背景のもとに、曹洞宗の学風が法燈派と融合しながら、比較的初期に於いて、『仮名見性抄』が成立伝授され、法燈派において行わっていたものが、やがて曹洞宗に於いて行われるようになったものと一応考えられるのであ

る。それは文安三年（一四五六）、宝山筆写の『無名冊子』に、道元禪師、瑩山禪師、峨山紹碩、心地覺心、月菴宗光、拔隊得勝、孤峯覺明、天目中峰、欽雪岩、高峰等の法語が集められ、抜隊の系統に伝承されたものとされることによつても裏づけられよう。

すでに各祖師には「仮名法語」が存したが、『永平道元和尚見性論』が道元禪師のものでないとすると、禪師には「仮名法語」が存しない。しかし『正法眼藏』も仮名法語とすると別であるが、前述の事情によつて一般には行われていなかつた。中世の融合的学風のもとでは、曹洞宗の開祖として、後世になるに従つて、曹洞宗においても、それにふさわしい「仮名法語」の存在を必要とした風潮が存した事は一応うなづけよう。

そこで、道元禪師と心地覺心との交渉を通して、金剛三昧院、興國寺とは密接な関係が存したので、同じく金剛三昧院、もしくは興國寺を中心とした法燈派で行われていた恭翁運良の『見性抄』に、何人かの手によって、「永平道元和尚」の名が冠せられて、ずっと後になつて曹洞宗に於いても用いられるようになつたのではないか、あるいは逆に、高野山に伝えられる以前に、既に「永平道元和尚」の名が冠せられていたものが法燈派でも行われるようになつたのではないか、そのいずれかと考えられるが、先づ法燈派において行われて

いた事は、一つには、最古の写本が高野山系のものと見られる事からも考えられる。<sup>(8)</sup>

曹洞宗と法燈派との交渉の発端は、從来、道元禪師が帰朝直後、覺心の要請で西方寺の篆額を書いた事に始まるとされるが、これは訂正されるべきで、金剛三昧院別當願性の請願によつたものと考えられ、それには明菴榮西（一一四一—一二五）の弟子で、天童山で道元禪師と同参だつた隆禪の存在を考慮すべき必要があるのではないかと考へる。即ち金剛三昧院二世中納言法印仏眼坊隆禪と同一人物で、金剛三昧院又は西方寺との交渉を持つ何らかの役割を果していなかったのではないかと見られる事からも、以後の関係も考えられると思うのである。

(1) 小論は『永平開山道元和尚法語』の諸本の比較による書誌的検討を目的とせず、またその伝承系統の研究を意図したものではない。中世において曹洞宗で、『正法眼藏』が行われなくなつた事との関係において見たいと思うのである。従つて主に駒沢大学所蔵『仮名見性抄』によつた。

(2) 長円寺本『正法眼藏隨聞記』日本古典文学大系三七一頁。

(3) 「仏向上事」『正法眼藏』岩波文庫本上四一八頁。

(4) 『聖一國師仮名法語』『禪門法語集』中巻。「大應仮名法語」同中巻。「拔隊和尚仮名法語」「塩山和泥合水集」同上巻。「月菴仮名法語」同上巻。「峨山仮名法語」同下巻。「峨山仮名法語」同中巻。「十二時法語」同上巻。

(5) 『本朝高僧伝』二十五、『大日本佛教全書』

(6) 「相公曰、去歲葬礼曰、大智院殿寺家興行之事被仰事覺之哉。愚謹白諾。日錄記之、相公又曰、寺家事是非共可有興行云々。愚謹曰、寺家再興事者可<sub>レ</sub>在<sub>ニ</sub>相公御一念。相公御一唉。又曰、今五岳之中能僧誰也。愚謹曰、五六輩有<sub>レ</sub>之、各爭<sub>ニ</sub>機鋒<sub>ニ</sub>南禪有<sub>ニ</sub>蘭坡和尚<sub>ニ</sub>相國有<sub>ニ</sub>月翁和尚、横川和尚<sub>ニ</sub>建仁有<sub>ニ</sub>天隱和尚、正宗和尚<sub>ニ</sub>東福有<sub>ニ</sub>了庵和尚<sub>ニ</sub>是也。此内孰出群。愚謹曰、横川出群者也。……又曰、何尊宿有<sub>ニ</sub>道氣。謹白於<sub>ニ</sub>江湖立<sub>ニ</sub>知識門<sub>ニ</sub>教者皆曹洞宗也。濟下嫌<sub>レ</sub>之、雖<sub>レ</sub>然於<sub>ニ</sub>工夫用心處<sub>ニ</sub>掃曹洞宗<sub>ニ</sub>也、殊橫川者有<sub>ニ</sub>一面目<sub>ニ</sub>者也、以<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>業者也」（『陰涼軒日録』延徳三年〔一四九一〕正月二十五日条。『大日本佛教全書』第一三六）

(7) 同『大日本佛教全書』一三七、

(8) 椎名宏雄氏「六地藏寺所蔵『無名冊子』について」『宗学研究』第十四号、昭和四十七年、六地藏寺に存する仏典類は、三世惠範上人（一四六一—五三七・八）が京都や高野山で蒐集したものといわれる。

(9) 拙稿「日本曹洞宗の歴史的性格」—道元禪師と隆禪・覺心との交渉を透つて—」『駒沢大学仏教学部論集』第五号、

#### 四

次に何故に他の禪者でなく恭翁の法語に「永平」の名が冠せられたかという事で、そして誰が何の目的でという事であるが、裏付け資料がないので、以下の論述は推論の域を出な

い。恭翁の法語に「永平」の名が冠せられた事については、一応考えられる事は、大乗寺三世であつた恭翁運良は、洞済の禅旨を会得していたばかりでなく、東大寺の戒壇院で凝然の華嚴学を聴聞したりしており、<sup>(1)</sup>相当博学な禅者と考えられる事である。また瑩山禅師は、運良を大乗寺の住持に決定するに当り、「付するに自筆碧巖集、櫻檣の払子、応量器を以て」<sup>(2)</sup>したと『延宝伝燈錄』は記しているが、これは後、大乗寺四世明峯素哲に返却されている。こういった関係が存すること、また瑩山禅師の撰述とされている『報恩錄』の下巻第十四則「不識上之機縁」があり、この則では「不識上の一句」が主題であるが、これと同じ名は道元禅師の撰述とされる『宗門全機三十四閑』の第三十四則「不識上一句」と共通し、更に瑩山禅師の撰述とされる『秘密正法眼藏』に「不識是現成公案也」とあり、更に峨山紹碩の撰述とされる『山雲海月』にも「不識上之一句者、此内之大事也」とあって、こういった関係が存することからしても、<sup>(3)</sup>運良との密接な関係が伺われるのがその第一である。

先に、『仮名見性抄』は、『正法眼藏』が大乗寺はじめ永光寺にもあつたから、永平下において、あえて「永平」の名を冠してまで用いなければならない必要がない事を述べた。そこで、次に大乗寺三世恭翁運良の入寺のいきさつ及び「六群の党」があつて、やがて大乗寺を出なければならなくなつた

事情と何か関係があるのでなかろうか。即ちそれは、想像をたくましくして云えば、大乗寺において二派に分れて反目したと考えられることは恭翁が臨済下の者であるという事と彼が道元禅師以来の永平下の立場を守ろうとした人々に対しての一つの方策として自己の法語に道元禅師の名を冠したのではないかという事である。

瑩山禅師の信頼を得て、その命によつて、大乗寺三世として入院した恭翁運良は、文保元年（一一一七）から二年頃に、瑩山禅師の後を受けて大乗寺を董すこととなり、延元二年（一一三七）頃まで、二十年間留つていた事が『大乗寺聯芳誌』によつて知れる。<sup>(4)</sup>つぎに運良の大乗寺入院に関する経緯であるが、大乗寺内に二つのグループによる確執があつたと考えられ、一つは瑩山禅師のグループと徹通義介禅師（一一三三—一三〇九）の門下としての瑩山禅師と同門及び他門出身者によつて形成されたグループで、後のグループの推舉によつて、運良が大乗寺住持となつたとするのである。<sup>(5)</sup>このことは『山僧遺跡寺寺置文紀』の流布本に、

大乗寺者先師開法之加州第一之貴寺也、門徒中可住持遺跡也。今暫雖不如意僧良伝燈下寺運止住管領。<sup>(6)</sup>

とあつて、「不如意の僧」とされ、また『本朝高僧伝』第二十六の運良伝に、彼が三世になつてから、衆中有「六群之党」嫉其盛化良不<sub>レ</sub>吝<sub>ニ</sub>去留。<sup>(7)</sup>

と六群の党が存したことが知れる。ただし彼の退院は、延元二年（一三三七）の頃であるから、瑩山禅師の示寂から十二年も後の事である。「六群の党」がいかなる存在であったのか、今日となつては知るすべもないが、私は、これは運良についての記述であるから、大乗寺において純然たる瑩山下の曹洞禅を継承しようとする者を指し、それに対し運良が臨済禅を鼓吹するため、あえて、自己の法語に日本曹洞禅の開祖道元禅師の名を冠し（と云つては云い過ぎかも知れないが）、自らの立場の正当化をはかると同時に、両派の対立を融和させる一つの方便として、また時代即応の形としてとつたものではなかろうかという事である。そう考えるには、彼には『見性抄』のほかその内容は全く伝えられていないが、『正法眼藏語』『禪戒正伝血脉相承説』の著述が存すること、中でも『正法眼藏語』が無関係には考えられない<sup>(9)</sup>のである。

こういった事が対立を益々深刻なものにし、やがて退院という事態にまで発展していったものではないかと思うのである。

恭翁運良という人は、寛正四年（一四六三）に南禅寺百九十三世の華岳建胄が書いた『勅謚仏林恵日禪師塔銘并序』には、  
師諱運良。号恭翁。卓爾儀形。詔然德量。禪河教海之弁。棒雨唱  
雷之機。人皆辟易以却。無嬰其鋒者。<sup>(10)</sup>  
とあり、その他『延宝伝燈錄』から推考するに、性格はきま

じめであるが、感情過敏（「師性急卒」『延宝伝燈錄』）な一面を持ち、物質的には淡白で、ものの考え方は緻密で論理的である一方、熱烈な信仰を持っていたと考えられる。それだけに大乗寺管理に当つては真剣であり、苦心をした事である。

さて、瑩山禅師は、運良を大乗寺住持と決定するに当たり、  
加州大乗<sup>久</sup>主。瑩山和尚招師住持。付<sup>ニ</sup>自筆碧巖集。櫻檻<sup>松</sup>子。  
応量器<sup>(11)</sup>。

と『延宝伝燈錄』は、自筆の『碧巖集』と櫻檻<sup>松</sup>子と応量器を与えたとある。『碧巖集』というのは、道元禅師が入宋将来の「一夜碧巖」のことであろうか。この「一夜碧巖」と「櫻檻<sup>松</sup>子」とは伝燈寺二世である運良の法嗣至庵綱存が侍者の無尽をつかわして、康永四年（一三四五）即ち運良滅後五年にして、大乗寺住持明峯素哲のもとに返却している。

一夜碧巖並櫻檻<sup>松</sup>子以無尽侍者恭令奉帰入賜、尊重百拜頂戴奉持  
仍自他之道德周蒙於四衆彼比之宗風高於五湖之事偏可依此一段者  
也、康永乙酉十月十八日、住大乘素哲（花押）<sup>(12)</sup>

ここにはじめて運良の生前ににおける曹洞宗との関係が成算されたことになるのである。

ところがここに問題がある。即ち運良は大衆に白眼視されていたにもかかわらず、『本朝高僧伝』第三十「賀州大乗寺沙門素哲伝」によると、

因請<sub>二</sub>益達磨不識話、山乃付<sub>レ</sub>書、參<sub>二</sub>同州伝燈寺恭翁禪師、翁相見畢都無<sub>二</sub>宗說。只申<sub>二</sub>寒溫<sub>一</sub>耳。哲亦不<sub>二</sub>拳話<sub>一</sub>七宿而去。翁返簡曰、這僧參<sub>二</sub>徹不識話<sub>一</sub>了也、山以說示。哲日、明眼宗師、有<sub>二</sub>發藥<sub>一</sub>也。<sup>(13)</sup>

と、また、同じく卷三十一「能州總持寺沙門紹碩伝」をみると、

謁<sub>二</sub>恭翁良禪師<sub>一</sub>翁一日命<sub>レ</sub>碩剪<sub>レ</sub>紙、風吹撩乱、翁問、是風動是紙動碩即舉<sub>レ</sub>尺、翁曰、真我弟子也、碩曰、祇承和尚証明、走出<sub>レ</sub><sup>(14)</sup>

明峯と峨山は共に恭翁に参じている事が分る。両者が参じて

いることは、『伝燈護國禪師恭翁運良和尚行実』にも見え、

瑩山禪師の指図によるものという。両者の参学の年時は共に不明である。大乗寺退院後といふ事になると問題である。しかし明峯は瑩山禪師の指示によつて伝燈寺運良に参じたのであるから、運良が大乗寺を退いたのは延元二年（一二三三七）、即ち、瑩山禪師滅後十二年といふ事になり、伝燈寺入院は少くともそれ以後であるから、これは運良が大乗寺在住中、しかも瑩山禪師生存中といふ事でなければならないと思う。

また峨山の参じた年時も不明であるが、運良から「真我弟子也」と言われ、峨山は「祇承和尚証明」とあるから、少くとも瑩山禪師から総持を譲受けた元亨四年（一二三一四）七月十七日以前、やはり瑩山禪師在世中の事と考えなればならないであろう。従つて明峯と峨山が恭翁に参じたのは、彼が

大乗寺住持中のそれも早い時期ではなかつたろうか。従つて両者は恭翁の大乗寺退院後は交渉を持つたとする見方は出来ないのであらう。そして「六群の党」の問題も瑩山禪師滅後に起つてきたものである。

大乗寺退院後の恭翁は白山下に真光寺のほか瑞應山伝燈寺、宝光山興禪寺、越中の放生津に興化寺、兜率寺を開いて大いに化門を張り、神異をあらわしたので、時人は肉身仏とたたえた。

乃退寓<sub>二</sub>白山之下真光寺<sub>一</sub>。時衆多染<sub>二</sub>瘟疫<sub>一</sub>。良責<sub>二</sub>土地神<sub>一</sub>妙理<sub>二</sub>現<sub>一</sub>不能<sub>レ</sub>加護<sub>レ</sub>投<sub>二</sub>之於河<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>日疫止。州民有<sub>二</sub>黨<sub>一</sub>円居士<sub>二</sub>崇<sub>一</sub>欽良德<sub>二</sub>捨<sub>一</sub>山林田畠<sub>二</sub>建<sub>一</sub>梵刹<sub>二</sub>。曰<sub>二</sub>瑞應山伝燈寺<sub>一</sub>。請<sub>レ</sub>良為<sub>二</sub>開山始祖<sub>一</sub>。洞済包笠<sub>二</sub>。不<sub>レ</sub>期雲來。隣民構<sub>二</sub>寶光山興禪寺<sub>一</sub>。延<sub>レ</sub>良為<sub>二</sub>一代<sub>一</sub>。良後往<sub>二</sub>越中<sub>一</sub>。届<sub>二</sub>放生津<sub>一</sub>。偶聞<sub>二</sub>羣兒戲曰<sub>二</sub>十文字河辺出遊<sub>一</sub>。忽憶<sub>二</sub>法燈之識<sub>一</sub>。架<sub>レ</sub>茅而居。四方歸者如<sub>レ</sub>市。大化<sub>二</sub>寶坊<sub>一</sub>。興化是也。又開<sub>二</sub>兜率寺<sub>一</sub>。二刹相竝。堂宇翼翼。……良所<sub>レ</sub>剪瓜髮。所<sub>レ</sub>墮齒牙。皆現<sub>二</sub>舍利<sub>一</sub>若綴<sub>二</sub>金粟<sub>一</sub>。時人号<sub>二</sub>肉身仏<sub>一</sub>。

と大乗寺を退いてからも、大いに化を張り、その学風も「洞済包笠」であり、学人も多く集り、恐らく紀州興國寺とも何らかの交渉を保つていたと考えられるのである。

（1）恭翁運良は、東大寺の戒壇院で凝然（一二四〇—一二三二）の華藤学を聽講した。その際凝然は禪に対する不明を運良に問難され、遂に恭翁に請問しその旨を得たと云われる。また叡尊

(一)(〇)一一二九〇)は、覚心に禪を学び、戒壇院の傍らに、禪堂を設けて修禪を怠らなかつたけれども、いま廢絶しているので復興したい旨、運良は凝然に依頼したという。

(2) 東隆真氏「初期の日本曹洞宗と臨濟宗法燈派との交渉『禪思想とその背景』三三二頁。

(3) 恭翁運良は、瑩山禪師の後をうけて、大乗寺三世であるか、あるいは明峯系哲が三世で、彼はその後を受けて「前住」の立場であるか、見解が分れている。三世と見るのは栗山泰音師で『嶽山史論』で「瑩祖が大乗寺を退かれしは応長元年の頃にして、明峯禪師が大乗寺に住山せられしは暦応の初めの頃である、乃ち明祖が永光寺住職の後ちなることは、聯燈錄にも共に之を明記して、この間に二十六七年の空虚がある、この空虚は即ち法燈国師の法嗣にして、瑩祖が參學の法弟なる、後ちの加州瑞應山伝燈寺開山恭翁運良和尚に依て充填せらるべきものにして、運良和尚は實に大乘三世の祖位に當るべき」であると見てゐる。その他佐橋法竜氏『瑩山』、東隆真氏『瑩山禪師の研究』である。明峯を三世と見てゐるのは、館残翁氏『加賀大乘寺史』。松田文雄氏「瑩山禪師の尽未來際置文について」『學研究』第十二号。私は、瑩山禪師が「付するに自筆碧巖集・櫻樹の払子・應量器を以て」したこと。明峯と峨山が運良に参じてゐること、また中國の風儀を受けて十方住持制度的傾向にあつたこと等を勘考して三世と見る。

(4) 館残翁氏『加賀大乘寺史』

(5) 松田文雄氏「瑩山禪師の尽未來際置文について」『宗学研究』第十二号、昭和四十五年三月、

(6) 「山僧遺跡寺寺置文記」元亨三年（一二三三）十月九日、「洞谷記」所収。『常濟大師全集』四一七—四一八頁。

(7) 加州伝燈寺沙門運良伝「本朝高僧伝」卷二十六、『大日本佛教全書』一〇二、三六六頁。著者の正元が二十四年前に上梓した『延宝伝燈錄』には「衆中にこれを嫉む者有り」とあって少しくニユアンスが違うが、『本朝高僧伝』の方が実際に近いのではなかろうか。

(8) 「六群の党」は本論の論旨の他に、運良の後席を遡る対立も関係していたのではなかろうかと推考する。

(9) 「所著述作有『正法眼藏語』『禪戒正伝』『血脉相承見性鈔』并語錄若干卷。」『本朝高僧伝』卷第二十六、『大日本佛教全書』一〇二、三六七頁。『正法眼藏語』は現存していないので如何なる内容のものが全く不明である。

(10) 「勅謚仏林惠日禪師塔銘并序」『続群書類從』第九輯、下、四二四頁。

(11) 「延宝伝燈錄」卷第十五。『大日本佛教全書』二二二頁。

(12) 館残翁氏『加賀大乘寺史』昭和四十六年石川県史書刊行会。

(13) 「加州大乘寺沙門素哲伝」『本朝高僧伝』卷第三十。『大日本佛教全書』一〇二、四二〇頁。

(14) 「能州總持寺沙門紹碩伝」『本朝高僧伝』卷第三十一。『大日本佛教全書』一〇二、四二三頁。この「話」は、六祖惠能（六三八—七一三）と法性印宗（六二七—七一三）との問答に似ている。六祖と印宗の問答は、『瘞髮塔記』『曆代法宝記』『曹溪大師別伝』『祖堂集』等の記述がそれぞれ少し異っている

ので明確ではないが、六祖が、風に動く幡について「不是幡動  
不是幡動講主云是什摩物動行者云仁者自心動」（『祖堂集』卷二）  
と印宗に説いた話である。恭翁運良は六祖のこの故事にならつ  
たものであろうか。

(15) 「大乘聯芳志」『加賀大乘寺史』

(16) 佐橋法竜氏は峨山が恭翁運良に参じたのは、伝燈寺を開いて間もないころのことと見てゐる（『峨山韻碩』二〇頁）。

(17) 「賀州伝燈寺沙門運良伝」『本朝高僧伝』卷二十六、『大日本佛教全書』一〇二、三六六—三六七頁。

## 五

『永平開山和尚仮名法語』は恭翁運良の『見性抄』と同一のものと考えられ、後にこの法語が曹洞宗のものとして他の法語と一緒に扱われてるのは、道元禅師の『正法眼藏』が一般化していなかつた事を意味しよう。ここに洞済交渉の一側面と中世における曹洞宗風の一端が伺えるのである。

洞済融和的な学風の下での曹洞宗の立場は、「五位」の参究に特徴づけられるが、『正法眼藏』と「五位」との関係、更に実践規範としての「永平清規」「瑩山清規」と「五位」との関係については、その一端を既にとりあげた。<sup>〔3〕</sup>今後の問題は、中世における「仮名法語」の盛行と「五位」の参究との関係の解明が残されていると言えよう。

以上によつて、洞済交渉のもと、『見性抄』は初め法燈派において行われ、後、曹洞宗においても行われるようになつたと考へるのである。これはまた、前にも触れた万治版の法語、即ち「永平開山道元大和尚法語」「洞谷開山法語」「洞谷二代明峯和尚法語」「洞谷僧生和尚法語」「峨山和尚法語」の五篇の法語が、瑩山禅師とその二高足たる明峯素哲と峨山紹碩および明峯下の永光寺十世館開僧生のものが一諸に行われていたことに見る事が出来よう。<sup>〔1〕</sup>

(1) これらの伝承については不明であるが、永光寺十世館開僧生の法語が加えられている。彼は美濃に静泰寺を開き、東海地方で活躍したのであるが、永光下十世と云えば、十六世紀前半に当り、當時、永光寺系統において行われていたものであるう。

(2) 「伝光錄」『常濟大師全集』一六〇頁。

(3) 「中世曹洞禪の一考察」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三十三号。「日本曹洞宗の歴史的性質」(三)『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第七号。「中世における洞済交渉と曹洞宗の立場」『駒沢大学仏教学部論集』第六号。

しるべし、臨濟門下も尊貴なり、自家門下も超邁なり（『伝光錄』）<sup>〔2〕</sup>といふ洞済融和的宗風を発展させてきたが、以上によつて、